様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 １６ 日現在

機関番号：１４４０３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2016
課題番号：２５３７０５５２

研究課題名（和文）照応関係のトップダウン式派生に関わる研究

研究課題名（英文）A Top-down Approach to Anaphora

研究代表者
寺田　寛（Terada, Hiroshi）

大阪教育大学・教育学部・教授

研究者番号：９０２６３８０５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：　この研究は、生成文法の枠組みを採用し、文頭から文末へ構造を作り上げるトップダウン式の派生方式による代名詞の照応を算定する。その内容は、主に次の３点である。
（１）照応形の形式が代名詞に置き換わる際に代名詞に強勢がおかれるという分析の妥当性を検討した。
（２）統語構造に付票（label）を貼付する際に代名詞の指示が決められるという先行分析の問題点を指摘した。（３）代名詞の移動によって先行詞との照応関係を算定するという先行研究をトップダウン式に捉えるために、先行詞の一部をコピーして代名詞として再利用する照応理論の妥当性を考察した。

研究成果の概要（英文）：　This research adopted the framework of generative grammar to explore pronominal anaphora within an approach to the computation of human language, according to which sentence structure is built up in a top-down fashion. The aim of this research was threefold: (1) It considered the appropriateness of analyses in which an anaphor is replaced by a pronoun when the latter is stressed. (2) It pointed out potential problems with Cecchetto and Donati's (2010) claim that the reference of a pronoun is determined as a result of a labeling process. (3) It considered the validity of an alternative theory in which movement of part of an antecedent creates a copy and the copy serves as a pronoun that refers back to the antecedent.

研究分野：英語学

キーワード：生成文法　ミニマリスト・プログラム　移動のコピー理論　トップダウン派生

１．研究開始当初の背景

統語論においては、構造上最も低い位置からより高い位置へとボトムアップ式に構造を形成し、解析や発音とは逆方向に文を構築する仮定が採用されている。しかし人間の言語は、意味や音に関わる制約を受けている。統語論で構築された文は、音や意味に関わる体系に指令であり、言語以外の外部体系に一番都合の良い形で情報を提供しているはずである。ボトムアップ接近法に異を唱え、文構築は「トップダウン式」に進むとのテーゼに基づいて、移動や一致について研究を行ってきた。

これまでトップダウン接近法を用いた研究は、国内外を問わず、他にはごく少数である。束縛理論についての考察も、ボトムアップ式に捉えられてきており、トップダウン接近法から見た場合にどのように捉えられるべきかについての研究は皆無と言っても差し支えない。

２．研究の目的

この研究の目的は、ノーム・チョムスキーの提唱するミニマリスト・プログラムという言語理論において照応関係がどのように定式されるべきであるかを考察することである。申請者はこれまでトップダウン式接近法による文構造の構築の研究を進めてきた。この研究を束縛現象にも適用する。再帰代名詞、代名詞類などの分布を、移動を用いて捉える研究が近年唱えられてきたが、この研究ではそれらの問題点を修正する経験的あるいは理論的証拠を提示する。この研究では、「照応形はどのようなものであるか」、「代名詞と照応形の関係はどういうものか」、「照応関係は統語的に移動によって決定されるのか」、もしそうであるならば、「コピーされる素性はどのようなものであるか」という問題点を明らかにするために、最近の生成文法において提唱されているミニマリスト・プログラムの視点から、照応関係に関して詳しく考察し、理論的説明を与えることを目標とする。

３．研究の方法

束縛理論をトップダウン式構造構築から捉えなおすという目的のため、束縛理論におけるさまざまな先行研究の問題点と課題を明らかにする。

平成２５年度には、照応形についての最新の分析を検討し、英語における照応形の分布を再認識する。

平成２６年度には、代名詞と再帰代名詞が強勢によって両者がどのように分布しているのかについて考察し、代名詞が現れる環境を整理する。

平成２７年度には、代名詞が束縛条件の違反を引き起こす現象が近年の付票貼付（labeling）によって捉えられるという分析について検討し、その分析の妥当性に疑問を投げかけ、可能な代案を提案する。

平成２８年度には、移動によって代名詞と先行詞の間の関係を捉える際に、これまでボトムアップ式の方法でしか提案がなされていなかったため、トップダウン式の代案を提案し、その分析の利点と欠点を詳細に検討する。また、照応と関わり合いが深い移動現象や摘出についても最新のチョムスキーの枠組みを用いた分析の拡張を試みる。

４．研究成果

平成２５年には、再帰代名詞(英語における himself や themselves や日本語の自分自身などの代名詞)は先行詞(再帰代名詞が指し示している名詞句)の移動によって出来るコピー(人間が作る文の構造においてある位置から名詞句などが移動しているように見える現象は、実際の移動ではなく、構造上のある位置にあった項目を別の位置に複写するという考え方を採用している)であるという趣旨の分析と一致操作 Agree(文の派生の途中で文の構造が派生され、その中に含まれる様々な素性のうち、関連するものどうしが互いに素性の値をやりとりするという操作のこと)にもとづく分析を比較検討した。一方は、移動の残すコピーは再帰代名詞や代名詞として具現されるという分析であり、もう一つは、再帰代名詞が Chomsky (2000)などで提案されているフェイズ（派生の途中で形成される構造的単位）ごとに解釈されるとする分析である。このような当初の目標を踏まえて、今年度は、照応形が生成文法におけるミニマリスト・プログラムの理論において、これまでの先行分析を概観し、その問題点を指摘し、それをもとにして今後のトップダウン式派生の観点からの代案を提示するための下地を作ることを計画した。これまでの先行分析には、フェイズ内部での一致操作による Heinat (2008)他の分析、一致操作に寄らないフェイズ内部で先行詞から束縛されるとする Charnave and Sportiche (2013)の分析、一致操作と再帰標示に基づく Reuland (2011)の分析などがある。Heinat の分析については、日本英文学会の関西支部の学術誌に書評の形で内容を紹介し、その問題点を指摘した。フランス語をもとにして議論を展開する Charnave and Sportiche (2013)の分析については、英語の照応形について検証した。英語における照応形の分布を検討し、純粋な再帰代名詞が現れる環境を整理した。但し、英語においてはそのような環境というものが果たして正確に捉えられるのかという疑問が残った。

平成２６年度には、再帰代名詞を代表とする照応形と人称代名詞を代表とする代名詞

類の分布について考察した。Hicks (2009)やKoster (1987)らの先行研究の問題点を検討した。照応形と代名詞類の相補的な役割分担については、Hicks でフェイズ理論を用いた分析が提案されている。代名詞に与えられる強勢(stress)の面から考察すべきであるという見解を Hicks が提案しており、代名詞に強勢が与えられるときとそうでないときで、代名詞が先行詞を取れる統語的な領域に違いがあるという分析である。Koster (1987)で取り上げられているデータをもとにして、筆者はHicks の分析に問題点があることを明らかにしようとした。そして、代名詞だけに統語領域の違いがあるという Hicks の分析の代案として、再帰代名詞は代名詞に置き換わることができるという提案を行った。そのような交替には、強勢が関与しており、照応形の形式が代名詞に置き換わるときにのみ、代名詞には強勢が置かれるという分析を行った。音韻論における、代償延長に類似した現象であると捉えた。さらに、この照応形と代名詞の交替が起こっていると分析した事例に関して、言語習得の点からもデータを取ることにした。英語を外国語として学んでいる日本人の大学生にアンケート調査を行い、代名詞の先行詞を日本人学習者が適切に策定できるのかを検討した。英語学習者は、交替が起こる環境においては代名詞の分布を学習していないことを明らかにした。このアンケート結果は、残念ながら、今年度の分析を支持するといえるものではなかった。

平成２７年度は、再帰代名詞と代名詞が束縛条件以外の方法で認可される可能性について研究を行った。特に、Cecchetto and Donati (2010, 2015)で示唆されている付票貼付(labeling)理論分析を吟味し、その妥当性と問題点について考察を行った。付票貼付とは、統語構造を構築するための統語操作が適用された場合に、２つの構成素を結合して作られた統語体が解釈を受けるために、その範疇を決定しておくことである。この付票貼付の操作が代名詞の解釈にも役割を果たすというのが Cecchetto らの分析である。彼らの分析では、(再帰)代名詞が文中のある要素を先行詞として指示する場合には、束縛原理が課せられ、それを満たさねばならないというこれまでの分析に代わる考え方として、代名詞が統語体に付票を貼りつけなければ、代名詞が機能を果たさないことになるという。しかし、代名詞の付票が統語体に与えられることは、統語体がもつはずのない誤った付票が貼りつけられることになるため、そのような付票貼付は排除される。この分析を検証していく上で、いくつもの理論的経験的な問題が生じることを明らかにした。すなわち、代名詞の主要部である決定詞が統語体に付票を与えても誤った付票とは言えない場合が存在する。このような問題点から、付票貼付による Cecchetto らの分析は維持できないものであると結論付ける。今年度の研究では、付票貼付を用いる案ではなく、代名詞の指示を代名詞のもつ素性とその一致操作とトップダウン式の構造構築から説明できる可能性を追求した。それにもとづけは、統語操作は動詞が構造に取り込まれる際にもつ、同一指示素性が依存要素との間に結ぶ検索関係(probing)によって指示関係が決定されるという主張を行い、言語事実からこれを裏付けた。Cecchetto and Donati (2015) の(Re)labeling という研究書については、日本英文学会学術誌に書評の形で内容を紹介し、その問題点を指摘した。

平成２８年度は、先行詞の移動のあとに作られるコピー構成素が代名詞として具現されるという Kayne(2002)の分析があるが、より最新の研究である Abe (2014)で展開された移動による代名詞束縛の分析をトップダウン式の構造構築法から捉え直すための可能な分析方法を提案し、その可能性と問題点を検証した。より具体的には、Dechaine and Wiltschko (2002)の DP 構造にもとづき、先行詞 DP の中に含まれる φP が別の位置へコピーされることで、he や her などの代名詞で置き換えられるという提案を行い、コピー理論によって代名詞の照応を導き出した。さらに、one と do so という代用形についてもこの分析が拡張できる可能性があるものの、多くの問題点があることを明らかにした。移動関係にも議論を進め、主語からの摘出について最新のチョムスキー理論による説明がどのようになるのかというテーマについて考察し、日本英文学会関西支部の招待発表で発表した。反局所性条件をもちいる Boskovic (2016)の説明を維持するために必要となる仮定はどのようなものであるかを考察した。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

① 寺田　寛,「英語の純粋照応形」,『大阪教育大学英文学会誌』, 査読無, 第 59 号, 2014, pp.49-62.

② 寺田　寛,「照応形はフェイズ内部で φ 素性の値を付与されねばならない：束縛条件 A を廃止する試み　Fredrik Heinat, Probes, Pronouns and Binding in the Minimalist Program, Saarbrucken: VDM Verlag Dr. Müller, 2008. iii+174pp.」,『英文学研究支部統合号 Vol.6、関西英文学会 2013 第 7 号』, 査読有, 2014, pp. 85(355)-90(360), 日本英文学会関西支部.

③ 寺田　寛,「him と'im と HIM の局所領域」,『大阪教育大学英文学会誌』, 査読無, 第 60 号, 2015, pp.13-25.

④　寺田　寛,「代名詞は誤った付票を貼るか？」,『大阪教育大学英文学会誌』, 査読無, 第 61 号, 2016, pp.15-30.

⑤　寺田　寛,「代ファイ句と代名詞句と代動詞句」,『大阪教育大学英文学会誌』, 査読無,第 62 号, 2017, pp.17-34.

⑥　寺田　寛,"Carlo Cecchetto and Caterina Donati, *(Re)labeling*, Cambridge, MA: MIT Press, 2015. Xiii+190pp."『英文学研究第 93 巻』, 査読有, 2016, pp. 219-226, 日本英文学会.

〔学会発表〕（計１件）

①　寺田　寛,「部分摘出における wh 一致現象について」（招待発表）, 日本英文学会関西支部第 11 回大会, 2016 年 12 月 17 日, 於神戸市外国語大学.

〔図書〕（計１件）
2016,『徹底比較　日本語文法と英文法』, 第 2 章(pp. 27-50), 畠山雄二編, くろしお出版, 東京. (共著者：平田一郎、岸本秀樹、本田謙介、田中江扶、今仁生美)

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
寺田　寛（TERADA, Hiroshi）
大阪教育大学・教育学部・教授
研究者番号：９０２６３８０５

(2)研究分担者
(　　)

研究者番号：

(3)連携研究者
(　　)

研究者番号：

(4)研究協力者
(　　)